

911.9
7

句
兄
弟



句見第

句見第



章乃て詠所乃てこれ如て
 物孫奇也一雜詩集子
 此一房我子一他さし句を
 自由を中作しきしりて流
 詞のこよかあし古詩古言經類
 とむし孫よりてふつき
 やしく云ふはるよの句は功

一丁此鼓子のみ
 一合意
 文句
 一丁此鼓子のみ
 一合意

謠物 三十六番

肅山

飛螢我を体いハ苦しい
 酒債すも且暮月もさへ
 秋の花もれ切溜乃桶
 淋くも人もえんカ持
 信所徒士ハ神笠
 掛造り所志賀の浦もや
 鐘も只鳴し先乃祢一名

晋子
 彫棠
 山
 晋
 山
 棠
 晋

長しの人見もよみ聖子隠き住
 うふ時しそは恋のあしは
 山の神妻戸をキリし開
 立ちるもや花根乃窟
 燦掃子笠も藪もこつて
 打方子酒をとこま菜くと
 佐屋巴りやうさけれといせの
 四乃鼓ハ月のおほり夜
 花の身三寶加持の行じ
 父大長を節乃葉
 うち兄もは怒るし
 名
 角螺

山 棠 晋 山 棠 晋 山 棠 晋 山 棠 晋 山 棠 晋

移る方まててもあるへの日記
 詫觸がうる鳥帽子引るま
 聖くま山と地妻此世中
 子規巴り十色も一色
 その母や子もるのあやく
 数珠切つて三悪路ハのり色
 酔て庐山乃高乃明の
 けす神と手志ま多ふ
 あり髪を肩の縫あげ
 月乃宿さうりも云てあり借ハ
 木好おもは用お茶をり秋

山 棠 晋 山 棠 晋 山 棠 晋 山 棠 晋

小世了の毎々くさる茶
 心了しとあまの文伯母
 茶職の弁はては所化好
 屯子も包れ 魚上る舟
 やふ入乃方はてはあまの境
 ありましくと春乃酒盛

癸酉八月廿九日乃登王父
 葬送の場と萌心乃悲
 懐と生乃起ふ

山
 晋
 崇

晋子

一珠と蛇と中家と脱す
 今も世し行神はあ
 世の石笑ふとる有是
 迹は詩とるあ乃酒
 物金と思ふ心氣も酒令
 此者の跡は子とる雪汁
 宗祈もましくはあ該賃
 大必持乃烟はあ子
 世母と櫻のまきの雜司谷
 茶院のましくはあ酒令
 山家で遊行と跡はあ子

今 産△疥しんし猿の子
曉の声 嵐まき 古戦場
石地まきし雪 籠るまわ
草強し麩をこりけり 谷のち
點の向至此 井関にて是
まけし来る 神楽波のくみ人
あふまけり 乙家の編笠
七夕平 揚枝をくくるとまて
仕似せぬ 悲哉多き色紙
花乃 懐子目方 山と川
海苔を力と 巻き 髪切を 唾

月々 死身々 死々 死乃を
玉が 光しぬ 能成と あり
此 鏡は 心あり 思ひ
世 越さむく 小 邪 不 服 差
立 込て 傍 房 多 文 中 小 柴 垣
何 日 追 ぎく 井 へ あり 窮
物 寸 寸 所 乃 男 ぎ ぎ
あ ち ち 平 仲 の 意
あ ち ち 形 事 あり
四 族 の 仕 着 七 恨 する 意
鄙 人 ち 鼻 して ち ち ち

齊トキのつらみみくき酔

風品幕じらよき一トキ月トキ

紋乃ちもぬもくまははは

ウ

芋の根よちいふ地の毛付

殺生石法ふるひる

当分の閑とあつと菰し

旅寐ゆかぬ春飯を賞

何にかよふ余の命百の上

うら僧都の長す乃濱

秋しづ繁の干物よる寝

牛乃ちうをみる夕月

佛トキも二所指記の敬る

しらまを玉餅尾の白

佛壇トキも化子任しるを乃時

一本トキも せん 入電

はくしうらむはたか老尼

即見トキ朋友のこもひ川乃

衰トキ老のあつ物しんん

ア持言トキ之四三のゆか 尚

好トキ目石の白かえりたえん

尤真トキ以此新とトク

東順傳

芭蕉稿

老人東順と稱氏るゝゝの祖は
江戶望田乃農士作氏と稱ス振氏
と云ふ名を晋子の母と云ふ
との名をいしてゝ七十歳をこゝせ
の如く月を病す枕の之は話あり
花鳥の情ありを悲しめ思ひ限
その身にたりとて神みゝせし
子よはらし形の句をかくみゝて大
柴舟典のこゝちあり隠るゝあり
時賢をいふ人て考乃産とて云ふ

何某のかりきり俸物とほて金魚
盤座乃盤すははとせは世後
をいひていふ名はの衣をさぐ杖を
折て業を捨つ既る六十手はは
ちり市店を山子ありを樂む
とらるるをいふは札をいふ
十とせある其筆のすこゝ車
こちりゝゝ上子生きて東歌
子とては是必大臨朝市乃
人たりとて

入月乃流を札に四隅あり

行草躰 三十四句

悲悲鳴

曹子

ちんをいしく蝦カニこをふる涙ふ
 並ナラくぬ鶴カウ乃 控カウのまゝに
 春荷とよの藤人のしひくお
 おれしをふ汁と焼物
 と食やと世目を志シるあふの月
 しシくまのくし菜乃をな
 と氣キはつツして小便濁る 新の昏
 世目セのあふるを志シる乃 衰

我 恋と人の内儀をりあはる
 湯豆腐乃湯のさあてつ汁
 菜 松のの味やうをさあてつ汁
 伏見乃強歩者前して
 幾昔の風土記のまゝ
 芋あて 似る 城中乃細
 川筋を引板と一座子叫小猿
 温尔入乃通る山乃乃月
 もの有しと酒市を拍カり
 菜タラの味
 名 菜の味
 長あ月は十里ハあり 菜モトイの味

荷の子を 負はる

二、あま下 蛇

寄付の 刀の 数十月 能霜

取長に なる 縁の 誰か

子 翁 翁 翁 翁 翁 翁

包 包 包 包 包 包

聴 聴 聴 聴 聴 聴

和 田 恩 切 切 切 切

炭 賣 の 中 加 活 心 難

毛 毛 毛 毛 毛 毛

之 物 籠 籠 籠 籠 籠 籠

花乃 妙 妙 妙 妙 妙 妙

茶箱 初 初 初 初 初 初

乃 也 女 房 唐 敏

神 の 月 十 年 都 女 子

行 然 然 然 然 然 然

少 比 乃 鶴 少 茶 乃 陽 光

店 流 の 尾 乃 赤 物 乃 花

我 之 位 乃 俚 小 和 歌

菘 菘 菘 菘 菘 菘

黄 鷹 乃 鳥 乃 赤 乃 松 乃

乃 中 燃 下 醉 乃 酒 乃

命我

言我

晋我

常我

晋我

常我

晋我

常我

晋我

常我

晋我

常我

晋我

常我

晋我

常我

晋我

常我

晋我

常我

晋我

常我

結成の酒をちりぢり 明後
車成ぬいて 命す 村木
白子 垢の裾を ぬく ぬく 下谷
古し びつて せむ 如 神子の 宿札
法措 なる 立 恙 単 單 單 單 單 單
おほし あり あり あり あり あり あり
句 出 中の 多き 多き 多き 多き 多き 多き
しら ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
もの あり あり あり あり あり あり
世 万 能 景 千 千 千 千 千 千
針 鉄 針 針 針 針 針 針 針 針

我 晋 糸 糸 晋 糸 糸 晋 我 糸 糸

あどし ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

糸

六月八日 櫻燕

閨指

紫 敷 子 玉 淋 淋 見え 見え 見え 見え
散 散 散 散 散 散 散 散 散 散
糸 様 邪 邪 邪 邪 邪 邪 邪 邪 邪 邪
蝶 の ゆ く 糸 を 酔 して 押 止
昔 の 月 厩 乃 額 の お が あり あり
脚 踏 水 と 糸 糸 糸 糸 糸 糸
川 の 氣 張 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
何 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

晋 指 指 晋 指 山 糸 晋 子

名の
 目^のを^て蠅^の入^り多^るを^は美^し
 親^乃我^子を^もた^はし^る親^を
 以^水を^うめ^をく^とあ^りし^る
 基^今此^猪も^共付^て並^し
 一^等も^加賀^音人^のの^所お^し
 や^りて^の下^戸や^膏の^方は^月
 面^疹の^形あり^あき^ハう^らし^ま
 す^す乃^乃刀^帯て^しも^ぬる^る
 瀆^焼の^目を^ふら^しむ^のの^所
 廣^平目^形り^るも^もし^乃お^る
 此^のは^海の^手お^しる^もぬ^ん

指^晋指^晋指^晋指^晋指^晋指^晋

乃^乃衣^衣半^半井^井の^門
 考^しり^もを^食れ^中の^志を^しり^り
 小^難を^初て^しる^塩時^時
 送^てて^送り^又之^に下^涼に^し
 四^月の^腋と^いふ^ぬつ^し製^し
 燦^掃や^かり^しに^袖の^方り^り
 小^舟は^多る^に指^の數^金口^口
 所^せも^く階^子を^しり^り躡^えん^し
 梨^甘菊^菊の^味を^しり^り水^肴
 扇^乃下^へお^る 虫^延虫^延

指^晋指^晋指^晋指^晋指^晋指^晋

子うまやしこはそ竹老の骨
能登のつる家 白山の温泉
静ある猿の鼻乃ゆこく
脱て下りあふ葉の松朋
大枝をも盗人も阿くみり
巢けくまうてさるる子

指 鳩 晋 松 鳩 晋

壬申三月五日即息

赤きりてむ入探せんめつを
階こむあふるもつるはる者
目あふむはけりを引くて

芭蕉 彫棠 晋子

お我のしゆよりを
冬月のはふけしかんか
出代さしておとせり
岡へ成きぬいり 提の
肩て中ちか不怒居き
足もよ菜種と却て芥の
茶を煮て出し 泊瀬姑学寮
下流のふねんし
つるこ 猫乃身をひそめ来れ
む了や襟もさしぬ 颯の白
祝はなとこしや せう

黄山 桃隣 浪杏 棠 晋 杏 蕉 山 隣 晋 棠

車の角窓のくろくちあきかん
三寸の折もまじりし唇
ま一と嚏もまじりし月
らんときくさき遠サカル 疫
愚ぢぢ 和当も友と新の店
言みゆありを物る箱戸極
山多れくくしり志つりし
福ありくく合歡の下圍
くくくく床のり方な
思もぬ毎午昼乃夕侍
元々しき曹洞宗の寒くり

蕉 隣 杏 山 晋 蕉 山 杏 棠 晋 隣 蕉

焦は多きいし多き焦
えぬあのみくく高を志し
すくくすくく次 傘
臨しふ星ハ皎けてる月の
候は先乃壘ひくく雁
松茸を近江詠くハ決山く
そくさいな子ハ下くく
老ハハハ過くく和より
毛ぬ名ありしと揚貴妃
付けし中てむく桃乃色
こくくの影乃隣くく三絃

棠 晋 蕉 山 杏 棠 山 杏 隣 蕉

六月廿四日真以

結_二庵_一河邊_二

舟人の裸_レ笠や云_レ升_レ峯

柳_一 は川を_レ飛_レ楫

百草の屑や花_レ時_レか_レあ_レん

柄_レ我_レ大_レる_レ月_レの_レ長_レし_レ

躍_レ子_レ乃_レ肩_レを_レく_レて_レ教_レへ_レり

金具_レと_レ土_レを_レく_レく_レ濱_レ縁

物_レし_レぬ_レ子_レ代_レと_レな_レか_レ家_レの_レん

白_レ衣_レ乃_レる_レ二_レの_レ計_レ乃_レ蓋

冬_レ枯_レも_レ折_レぬ_レ愛_レ岩_レ青_レ松_レ寺

星_レお_レり_レ訪_レふ_レ 闇_レの_レ 霜_レ 毛_一キ

恙_レや_レも_レま_レぬ_レの_レ襟_レを_レあ_レき_レ小

見_レて_レ投_レ之_レは_レ用_レの_レ切_レ帝

お_レり_レは_レ衣_レを_レま_レむ_レ川_レ簀_レ垣

神_レ々_レお_レ摸_レき_レお_レし_レと_レ吸

下_レあ_レる_レの_レ形_レは_レ永_レ老_レて

志_レや_レし_レろ_レを_レあ_レく_レ衣_レを_レ乃_レ身_レ自

合_レの_レな_レも_レ志_レ賀_レの_レ山_レ裁_レ自_レし_レ雪

難_レ福_レふ_レ筈_レえ_レん_レの_レ櫛_レと_レ鳴_レ鳥

靴_レ箱_レけ_レら_レえ_レん_レと_レし_レふ

吟

晋子

沾德

吟

晋

吟

晋

吟

吟

晋

吟

晋

吟

晋

吟

晋

吟

近つきの乳母よりなる傀儡師
お基より了次ありお殿
焼く木は垣の傍にあり
荷ふしよれより嵐出る舟
僧ら皆耳を寒く休ませ
粉河の鼓をたたく
懐くちよ卵乃目利笑ふ人
解くよ力のつとめいぬ蝶
あしさんと階子棧し舟の氣
流すよこの物事よあり
唯子よりやとらゆる舟の音

唯吟晋徳
吟徳吟晋徳
吟晋徳
吟晋徳

たあす錢もこれ同じしもの
物艱をよみては買ふ氣に
世よりあつた木並場のふ
何のやうな女も成て花の陰
よ吹おろす人の子

三子草菴をととれ
坊の雨より枕よりあて
雨乃脚目半はあなを友
多桶の蓋より一糸の荷
寂椿より八重の木槿をあらう

吟月
素衣
紅

書十
千
月
号
紅
月
号
紅
月
号
紅
月
号
紅
月
号
紅

新之志を京昆布の色
標七子乙女は一月乃庭
乃石は這は家の在
以棧を修(心)おとし
燒(山)越(身)を(息)是
下(心)の葉(行)の渾(之)り
押(心)を(可)恋(の)聲(氣)
一時(柄)を(勝)志(つ)ふ
股(立)を(心)に(致)し(心)
中(擇)心(し)し(心)に(論)の(表)
音(れ)自(己)也(茶)を(心)酒

あまも枕(心)人(心)踏
鴨(目)を(心)里(の)月(光)
鯉(心)を(心)の(心)花(柳)
生(心)を(心)地(心)の(心)
春(心)を(心)後(心)碁(石)の(心)何(心)交
下(心)着(心)を(心)心(心)乃(心)脱
心(心)の(心)心(心)心(心)心(心)
心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
一向宗(心)乃(心)南(心)无(心)阿(心)弥(心)陀(心)佛
借(心)素(心)袍(心)心(心)心(心)心(心)

書
千
月
号
紅
月
号
紅
月
号
紅
月
号
紅
月
号
紅

諸役御免の標はく門
切し船治的のやゆる部云
換子をみまて書并れえ徒
十八がすまふよきを好くむし
木曾木つるゆり月の川を
百姓の位どいよぬ多る水
お行治舟のく乃世中

みよれよ水と宿いよ
あやよいよん廿二句
しよ通これ

七月廿五日
於深川業家院

つるよれ系をよゆらや新凡
雨りおはよて神よあ出
初甕よよて荷前ナカの宿り人
舟の舟あて船はよ
忘れあ換て蘇鉄の塩をかき
につよゆら又よ色るく
よこやうるをゆらぬ
盃うるてぶら場をよ
つよと女やよもりゆ
きこ精おしりよんゆえ
まき茶茶巻はるる闇のそ

丹 晋 紅 月 晋 紅

崖 神 叔 介 我 晋 子 叙 雪 我 晋 雪 叔 晋

隣を男猫は方と妻

くは風よの衣はあは 神の解

縁づき海家ののらよ多板

花れ女 聖天町や一のあらん

淨福降くくし幕を返良

月雪ト切りくちん 寮住居

園栗リ遊山絶リ

二三俵リ板ちまのりリ

百りけきして逃ル盗人

大さの川幅コ向小風

一小を焚タイて仕ス松方

此系ス用さば骨トとむ

めれと用さば骨トとむ

老シるも老乃碎レ狂

宋桓ウらも老乃碎レ狂

ろくろトお替カハセものふ大眼目

とほほシも志スぬシもすス

恥シや湯女子泣キてあハる

狂詩乃神リ人ノ月

ありぬキ飄フ雲ノ履カびリ

田ノ鹿ハぬキてシる

心敬の也レ話スとシる

置

叙

晋

方

叔

我

晋

叔

方

晋

叙

雪

叙

晋

叙

晋

叔

雪

晋

我

雪

晋

雪

赤紫の芥、寒はえんや
下市乃と夕、曉立ちを盛
約の祈、袴の鈴のまは

晋 我 紅

うすくみの中
こゝろと即るサ二句

寒玉

神鞋ハ、陽はあるといれ
猿戸のきこく夕、庭乃菊

桂花

四ツと月、舟も呼ば

紫紅

粉のきり木を、けしき
ユル

秋色

世ろ紫の眼、あまの海

晋 王

功者な、基けと吐く友

手あて、あまの酒の

手裁タテにく、目乃江セミ

四十、髪のを、玉挽

は、あまの、ふの、あやこ

う、く、お、柱、あまの、う

あ、偈、を、く、あ、あ、あ

あ、後、を、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

晋 王 花 晋 紅 色 晋 花 王 晋



函柿乃門のあそけんさる月

あかあかあつく一茶乃茶垢

おむをふくあつくふ包之縁

四糸で買つてはら乃杖

彼岸中から涙のあつり

娘の笑のあつり サニト

米掾のあつり

法隆寺のあつり

花 色 取 香 色 花 玉 色

